

遊びの教育的課題 — フレーベルを中心として —

相 良 麻 里

(平成8年9月30日受理)

Educational Issue of the Play — Concerning Fröbel —

Mari S AGARA

(Received September 30, 1996)

はじめに

遊びは、人間のその根源的に湧きあがる生の流れの表現であり、一面化された人間を全体的人間へと導いてゆく重要な役割を担っている。特に、子どもにとって遊びは外界への窓口のひとつであり、様々な事柄を学びとる際に重要なものとなる。それゆえ遊びは、豊かな人間性を形成してゆくために不可欠であると言える。

しかし現代の社会的・経済的動向を振り返ってみると、遊びは管理され、形式化され、幼児教育における重要な課題である「主体性と創造性の確立」が達成され難い状況に陥りつつあるようである。

実際、遊びを重視するあまり、もともと子どもたちにとって自由な活動であるべきはずの遊びを強制する傾向が近年生まれてきている。例えば、既成の玩具や、テレビ等の過剰な供給は、他者(対象物)と能動的且つ積極的に関わりあいを持たずに遊べてしまう態度を促進し、その結果、他者(対象物)から与えられ・働きかけてもらうことがあたかも当然のような遊びのスタイルが確立され、子供たちを受動的・消極的な方向へと導いてゆくおそれがある。また、塾やお稽古ごとに追われ友達と遊ぶ時間を失った子どもたちは、遊びへの衝動そのものも稀薄化してゆき、遊べない子どもを生み出す一因となっている。事実、教師や友達のまわりをただうろろうするだけの“遊べない子ども”の姿も、すでに多数報告されている。このような事態は遊びというものの真の意味と重要性の無理解、理論的把握の浅薄さに起因するところ

が大きいのではないだろうか。

見渡すところによると、現在において確固たる統一された普遍的な遊び理論が確立されているわけではない。現代の社会状況を踏まえた上で遊びの概念を捉え直してゆくことが、いま求められているものと考えられる。

そこで本稿においては、遊びのめざすところとしてフレーベルの陶冶理論を軸としながら、子どもにとっての遊びの重要性について再考察してみたい。

I

「遊び」とは? その意味の規定となると、かなり困難な作業であろう。というのも、遊びといった生の現象形式はきわめて多面的であるため、その意味も多種多様な観点、側面をもちあわせているからである。それゆえ、これまでに、様々な角度からあらゆる研究がなされ、遊びの本質を人間学的意味において考察しているもの、遊びを科学的に分類し説明的原理として考察しているものなどが見られる。フレーベル(Friedrich, Fröbel) シラー(Friedrich, Schiller) スペンサー(H, Spencer) ホール(G, H, Hall), グロース(K, Groos), ホイジンガ(J, huizinga), パーリィ(G, Bally), ショイエルル(H, Scheuerl) など、遊びの研究は数知れず多くの研究者によってなされてきた。そして現段階において遊び理論の展開は、ホールやスペンサーのような、遊びを各科学的に分類し(生物学・社会学・心理学など)その現象と方法論の分析・説明を行うものが主要な流れとなっている。こういった一つの現象に焦点をあて因果関係を分析・検討することは、子どものある発達の一面のメカニズムを解明する上では有効であり、ある意味重要

な視点であると言えるかもしれない。

しかし、子どもが発する行動は非常に複雑多岐にわたっており、それらすべてに何らかの意味づけを行うのは容易なことではない。また、それ以前の問題として、科学的な遊びの細分化によって得られるものは個々の断片的な知見の寄せ集めでしかない場合が多く、全体的・総合的な観点があるとは言いにくいのが現状である。そのため、遊びは、技術的な面のみが強調され、学習活動や学習方法といった外的に働きかけるものにすりかわり、目的実現のための方法論的意味合いを強くしてしまう危険性をもはらんでいる。そこで遊びは、シラーや、フレーベルにみられた「全体的人間」・「善なるものの湧き出る源泉」にもう一度立ち返る必要性が高まってくるのである。

本来、遊びは子どもの内的な自由な活動でなければならないと考えられる。そして、子どもは、遊びによってまた遊びのなかから、豊かな人間性を育成し、自らの自立性を確立していく。それゆえ、現代において、遊びというものをとらえようとする時、遊びの本質や人間学的意味というものが重要になってくるのは、必然的なことであろう。

教育史上、子どもの遊びの重要性と意味を見出し教育にとりいれたのはフレーベルが最初であった。フレーベルは遊びこそが子どものもっている可能性を発達させる唯一の手段であると考え、子どもの遊びは真剣で、深い意味をもち、そして子どもの発達の最高の段階であると述べている。また、遊びは子どもの内的なものが自由な活動として自然に外に現れたものが遊びであるとも述べている。

言い換えれば、遊んでいる姿こそが、この時期の子どもの発達の象徴であり、非常に良く遊べるという状態が、子どもが元気に良く発達して創造性を高めているということなのである。このような視点は、子どもにとっての遊びをどのような視点でとらえるかということに直結していることである。

フレーベルは、『母の歌と愛撫の序』において次のように述べている。Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel (無邪気な遊びのなかに、しばしばより高度な意味が存在する。)

フレーベルは遊びの理論と実践の中で、彼の教育学の構築において見出された諸原理・諸原則・諸概念がそれぞれ、その最も美しい固有の場を得、自己実現を見、

集大成的な意味をもっと主張し、遊びこそが子どものもっている可能性を発達させる唯一の手段であると考え、子どもの発達の最高の段階であると述べている。また、遊びは子ども内的なものが自由な活動として自然に外に現れたものが遊びであるとも述べている。そして、彼は「人間の教育」の中において、「遊戯とは、すでにその言葉自身も示していることだが、内なるものの自由な表現すなわち内なるものそのものの必要と要求に基づくところの、内なるものの表現にほかならないのである⁽¹⁾。」と主張するのである。すなわち、子どものちょっとした遊びでも、それらには未来における世界を認識しゆくための手立てがあり、遊びを通してさまざまな模倣や経験をしてゆくことが重要になってくるのである。このような視点で子どもの遊びをとらえようとする時、我々は遊びの陶冶価値の深い意味についてあらためて考え直さなければならないのではないだろうか。

II

フレーベルによれば、遊びは人間陶冶の初期形式であった。そして、彼は陶冶をカテゴリー的なものと把握し常に志向していたと考えられる。まず、フレーベルは、ボール遊びを例に遊びの重要な陶冶価値について具体的に提示している。「小さなボールが軽く動いたり、運動したり、行ったり、走ったりころがったりするように、我々は、まもなくそのボール遊びで子どもも動いたり、運動したりするのを見る。つまり、子どもにも行ったり、走ったりする欲望が現れてくる⁽²⁾」子どもにとってボールで遊ぶことは、自己を表現したり、能力を訓練したり、増進したり、認識したりする手段のひとつであり、また「子どもをとりまくすべての環境の本質的な特性や現象や関係がボールにおいて、またボールを通じて現れてくる⁽³⁾」と述べてることから、それらは材料、形式や形態、大きさ、運動と静止、空間・時間関係、光の現象、色彩などのカテゴリー的なものなのである。

それゆえフレーベルは、ボール遊びは、「子どもの自己の内界の表現手段としての、また子どもの外界及び環境の理解の手段及び認識の手段⁽⁴⁾」なのであると主張するのである。

次にフレーベルは主張している。「人間があらゆる特殊なもの、個別的なものに対して、一般的なものおよび統一を認識し、次に一つのものから他の物を推論する⁽⁵⁾」ことが可能であるために「規範的なもの、基本

的なもの、模範的なもの⁽⁶⁾」を習得することが必要であり、そして、それは「自然への案内者、外界の開拓者である⁽⁷⁾」とも述べている。また、フレーベルは、「もし人間が、たとえわずか一つのもので完全にそれに徹し、そしてこれを把握するならば、彼はそれによって同時にまた他のあらゆるものを根本的に理解することができるようになるであろう⁽⁸⁾」とも述べている。

このことに通じていると考えられる内容をフリットナー(Wilhelm, Flitner)も主張している。「人間形成は、精神が、最も実り多い点において獲得され、そして、出来のよい財産から、教養ある人間は、みずから方向を見定め、そして既知のもののおかげによって、新しいものを我が物とすることができるということにある。ここに真の人間形成の活力は基づいている⁽⁹⁾。」と、また、ドイツの教育学者のクラフキー(Wolfgang, Klafki)も先に述べたフレーベルの主張を指示している。そして、こうした考え方は特にクラフキーの陶冶理論の主要な契機をなすものであると考えることができるのである。

III

フレーベルにとって、遊びの本質は予感、生の形式に関わりあうものである。まず、予感との関係について考察してみる。

フレーベルは、「遊びは、子どもに、外界において外界を物体界において力の世界を、精神界を感じさせ且つ予感させる⁽¹⁰⁾」と主張している。これは、子どもが遊びによって体験し、解明しつくりあげている精神世界は自然に内なる生の流れが表現されているものでなければならないということを示している。つまり、子どもは、遊びのなかで「予感」によって対象、大人の精神界の法則や経験を獲得しうる手掛かりを先取りしているのである。このことは、子どもの遊びの世界は大人の世界とは一見異なっているが、奥深い部分においては、統一されていることを意味し、この予感において人間は、概念的に明確になる以前により深い意味を感じとっているのである。また一方では、子どもの遊びの世界は、真に統一された大人の世界で止揚されると考えられる。「人間が高められた意識をもって彼の生の昔の最初の出発点へと—いわば彼の予感のなかに—しばしば回帰することによって、人間はその予感において、本来的且つ真に“自己自身”を獲得するのである⁽¹¹⁾」そして、フレーベルはこれら、遊びによって形成される予感が教育の課題ではな

いかと考え、遊びと予感との関係について重要なものと位置付けている。

次に、遊びは生の形式とどのように関わっているのだろうか考察したい。

フレーベルは子どもの遊びのめざすところとして、美的形式・生活形式・認識形式という三つの重要な形式にまとめている。これはペスタロッチの人間陶冶理想、調和的発展に対応しているとみることができる。つまり、美的形式は、心情的・生活形式は、技術的・認識形式は、知的という意味に置き換えることができ、それがペスタロッチが述べている人間の基本能力である手・頭・心にそれぞれ対応している。フレーベルはこのような、三つの形式を心情的に深めたものと精神を主体にしたものに子どもの遊びにおける自発的創造的活動を分類し、それぞれの形式を早期の段階において育まねばならないと指摘している。そして、そのなかでとくに重要視されるべきものが認識形式であり、この認識形式においては、カテゴリー陶冶につながっていくものであると考えることができる。なぜなら、遊びは自己を認識するための手段であるとともに世界を認識する手段であり、それらを媒介しているものがカテゴリー的なものであるからである。

IV

上述のように、人間陶冶の初期形式としての遊びを考えようとする時、カテゴリー陶冶という視点が重要になってくるわけであるが、以下においてはクラフキーの陶冶理論について考察し、カテゴリー陶冶について説明を加えていきたい。

18世紀後期以来、陶冶理論やその実践が歴史的発展の過程において、次第に一定の独自性を獲得し、一定の法則や組織へと発展してきたが、この過程において絶えず2つの契機が確立され、対立していた。その一方が、客観的—内容的契機に基づく理論「実質陶冶理論」であり、もう一方が主観的—形式的契機に基づく理論を「形式陶冶理論」である。クラフキーはそれぞれを2つの根本形式に区分し、それを批判的に考察している。すなわち、実質陶冶理論を陶冶理論の客観主義と古典的なものの陶冶理論に・形式陶冶理論を機能的陶冶理論と方法的陶冶理論に区分し4つの視点から批判し、吟味したのである。

以下、クラフキー4つの視点を挙げてみよう。

陶冶理論的客観主義

クラフキーによれば、陶冶理論的客観主義とは、陶冶の本質を客観的な文化内容との同化、習得に見出す立場のことである。そしてこのような陶冶観の理想や目標は、「文化の高さに立つ事」であり、所与の文化財を子どもたちに伝達し、子どもたちを文化の担い手にまで仕上げる事とされている。しかし、彼は、この考えかたは3つの点から批判されなければならないと述べている。第一点は、客観的文化内容やその価値・意義を歴史性から解放し、それに誤った絶対化・普遍妥当的な外観を与えるということであり、第二点は陶冶内容と知識内容との同等設定に関する問題、第三点は陶冶内容の選択基準の問題である。

古典的なものの陶冶理論

これは、陶冶理論的客観主義において欠けている教育的選択基準に着目し、「古典的なもの」にその基準を求め、それによって陶冶の本質を規定しようと努めるものである。ここにおいては客観的文化内容すべてがその価値ゆえに必ずしも陶冶内容になりえないし、また学問構造にその陶冶意義を見出す必要もなく、すなわち「古典的なもの」のみが真実に形成的意味をもつのである。古典的なものの陶冶理論に批判される視点は2つ存在する。一つは「古典的なもの」を規定する前提となる「古典的なもの」としてのある作品、人間的業績、過去の文化などの一致した承認」自体が問題であるということであり、もう一つは現実の具体的な状況において陶冶問題が問題化する場合において、「古典的なもの」の教授学的意義の限界が明らかになるということである。

機能的陶冶理論

陶冶の本質を諸内容の取り入れや同化ではなく、身体的・心的・精神的諸能力の形成・発展に見出す立場のものである。そして、これら学習によって獲得された能力は、他の内容や状況において「転移」されるものと考えられた。この機能的陶冶理論に対するクラフキーの批判は、能力を陶冶内容から分離し・孤立的に考え、人間を諸能力の統一体としてみなすあり方に向けられている。そして、人間の能力は一定の文化環境・文化内容との出会いの中で始めて活動形式にまで組織されるものでありそれゆえに、人間の諸能力が何かある内容において明白

になる前に、それから独立して実体的に存在するという考え方は逆であって、証明されえない仮説にすぎないからだと言っている。つまり、陶冶内容は諸能力の解放と訓練のための手段ではなく、それ自体が一定の仕方での個人の精神における入口を見出したとき、何にしても転移されるという意味で諸能力と名づけうるものであるからである。

方法的陶冶理論

これは子ども、主体において出発する点においては機能的陶冶理論と類似しているが、主体の自己陶冶への過程にその端緒を求めるものである。この立場においては陶冶の本質を子どもが、後の生活がそれを必要とするとき、その援助をもって豊かな内容を自己のものとする事ができるような思考様式、感情カテゴリー、価値尺度の獲得と統御、すなわち方法的獲得を見出だしていくものである。

クラフキーのこれに対する批判は、方法的科学主義、陶冶の方法的に誤った科学化に向けられている。それは内容の構造そのものが教育的方法の本質を規定しておりそれは、方法の内容の拘束性といった事実を否定しているからなのである。つまり、方法はその対象や内容との相関関係においてのみ意義を有するのであり、また、それは内容的に具体的な問題との出会いにおいてのみその条件によって実体化されるといえるのではないだろうか。

以上において、クラフキーの4つの陶冶理論を説明してきたが、要するに、ここで問題となっていることは、陶冶過程における内容・能力・方法をそれぞれに分離し孤立化させ、閉鎖的・一面的に強調するあり方、陶冶の一面的理解のしかたなのではないだろうか。

もちろん、それぞれの陶冶理論は全体的な陶冶理論にとって意味深い真理契機を有するものである。従って、その端緒の一面性を「統合」によって克服する試みが課題として浮かびあがってくる。そこで、クラフキーはこの課題の解決の糸口として「カテゴリー陶冶」理論（精神的なものが高まり志向の枠組みが形成されていくつまりカテゴリー的というのは考えの枠組みをつくりだすもの）を見出したのである。そして、このクラフキーの「カテゴリー陶冶」が、先にも述べたフレーベルの「ボール」の中に実は現れているものなのではないかと考えられるのである。

フレーベルは、「子どもが彼の内の世界をそれらの遊

びや道具によって外の世界に表現し、外の世界の諸現象をもっと自分に身近なものにし、こうして内界と外界の両方についての認識を媒介するのにそれらの遊びや道具が役立つ⁽¹²⁾と述べている。このことからフレーベルの遊戯論は、フリットナー・クラフキーの主張する意味での陶冶につながっているものであると言えよう。そして、フレーベルの遊戯論を再考察しようとする時、クラフキーの一般陶冶・カテゴリー陶冶という観点が重要であり、これらの観点からフレーベルの遊戯論のルネッサンスが可能になってくるのではないだろうか。

結 語

フレーベルにとって、教育の一般的課題は「内的なものを外的に、外的なものを内的にしてこの両者に統一を見出すこと」であった。「内的なものを外的に」とは自己を外界にむけて表現することであり、「外的なものを内的に」とは外界から自己な内面に吸収し、とりこむことである。そして、この二重の課題を媒介する基礎をなしているのが遊びなのである。

フレーベルの遊戯論を中心として、クラフキー・フリットナーの主張から遊びについて検討してきたが、つまるところ陶冶理論の一面的解釈が問題なのであり、カテゴリー陶冶という視点から遊びをとらえ直すことが重要になってきている。これらのことから、従来のフレーベル研究においては表現という側面が強調されがちであったが、以上のようなことから考えると、遊びのめざすところはカテゴリー陶冶なのではないだろうか。

フレーベルの「遊びはきわめて、真剣なものであり深い意味をもつものである。母親よ、子どもの遊戯をはぐくみ、育てなさい。父親よ、それを庇護しなさい⁽¹³⁾」「遊びはそれが正しく認識され、かつ正しく保護されるなら子どもは教育され、そして、そのために子どもが発達せねばならない世界へ子どもの目を開くものである⁽¹⁴⁾」といった主張は以上のような観点から再考察することが重要であろう。

結局、フレーベルの遊戯解釈についてはボルノーを主として、ロマン主義哲学の立場からの研究が多くみられた。フレーベルを再評価するためには、カテゴリー陶冶的側面から考えることが重要であり、これらの視点から、遊びの本質をとらえ直していくことが、今、必要なのである。

謝 辞

本研究にあたり、多大なるご協力、ご指導をいただきました教職の諸先生方に深く感謝の意を表します。

註

- (1)「人間の教育」上巻 フレーベル著 荒井 武訳 岩波書店 1982年 PP71
- (2)「フレーベル全集 幼稚園教育学」第4巻 玉川大学出版部 1981年 pp381
- (3) " pp86
- (4) " pp86
- (5) " pp60
- (6) " pp60
- (7) " pp312
- (8) " pp61
- (9)「一般教育学」ヴィルヘルム・フリットナー著 島田四郎・石川道夫共訳 玉川大学出版部 1988年 pp172
- (10)「幼児教育論」フレーベル著 岩崎次男訳 明治図書 1985年 pp58
- (11)「Friedorich Fröbel : Ausgewahlte Schrifren」 Erika, Goffmann 1951年 pp96
- (12)「フレーベル全集 幼稚園教育学」第4巻 玉川大学出版部 1981年 pp268
- (13)「人間の教育」フレーベル著 荒井 武訳 岩波書店 1982年 pp71
- (14)「幼児教育の思想」荘司雅子著 玉川大学出版部 1990年 pp37

参考文献

- 「Friedorich Fröbel : Ausgewahlte Schrifren」 Erika, Goffmann 1951年
 「気分の本質」O・Fボルノウ著 藤縄千艸訳 筑摩書房 1973年
 「フレーベルの教育学」O・Fボルノウ著 岡本英明訳 理想社 1973年
 「遊びと幼児期」西頭三雄児著 福村出版 1974年
 「Studien zur Bildungstheorie und Didaktik」 Wolfgang, Klafki 1975年
 「フレーベル全集 幼稚園教育学」第4巻 玉川大学出版部 1981年

相良 麻里

- 「フレーベル全集 幼稚園教育学 統幼稚園教育学 母の歌と愛撫の歌」第5巻 玉川大学出版部 1981年
- 「フレーベル教育学概説」倉岡正雄著 建白社 1981年
- 「人間の教育」フレーベル著 荒井 武訳 岩波書店 1982年
- 「幼児教育論」フレーベル著 岩崎次男訳 明治図書 1985年
- 「一般教育学」ヴィルヘルム・フリットナー著 島田四郎・石川道夫共訳 玉川大学出版部 1988年
- 「幼児教育の思想」荘司雅子著 玉川大学出版部 1990年
- 「教育の基礎理論」正木義晴著 酒井書店 1992年
- 「幼児と教師」正木義晴著 酒井書店 1993年
- 「フレーベルにおける遊びとカテゴリー陶冶」正木義晴著 東京家政大学研究紀要第33集 1993年
- 「クラフキーの「二面的開示」に関する研究」渡辺光男著 勁草書房 1994年